



繰り返される大火災、 自立支援住宅で！

先月1月31日、札幌市の自立支援住宅「そしあるハイム」の火災により11人の入居者が亡くなるという、痛ましい火事がありました。

この共同住宅の各部屋には石油ファンヒーターが設置されていて、火災報知機はありましたが、スプリンクラー設備はありませんでした。施設は下宿屋・アパートと同じ扱いで、法令上スプリンクラーの設置義務はありません。入居者は40～80歳代で高齢者が多く、足が不自由な人もいたという事です。

自立支援住宅の実情

支援少なく厳しい運営

民間が運営する同種の施設は各地にあり生活困窮者の受け皿となっています。公的支援は不十分で、スプリンクラーなど高額な消火設備まで手が回らない状況の下、悲劇が繰り返されています。

同種の施設で生活困窮者向け施設「無料・低額宿泊所」という名称をご存知の方もいらっしゃると思いますが、ある「無料・低額宿泊所」の場合、老朽化したアパートには

狭い個室が並び、風呂とトイレは共用で、食事も提供するが家賃は格安。入居者のほとんどが生活保護受給者。改築資金はないという現状です。

◎ついのすみか

無料・低額宿泊所は本来、生活保護受給者や低所得者が自立するまで過ごす、一時的なシェルターです。しかし、体の衰えや病気が高齢者の就労や自立を阻むというのが実情です。民間の一般賃貸住宅には敬遠されますし、介護施設にはなかなか入所できません。その結果として高齢の生活困窮者の「ついのすみか」になっています。

無料・低額宿泊所

規制を強化する方針!

厚生労働省は、「無料・低額宿泊所」について、防火態勢や個室面積の最低基準を定めるなど、規制を強化する方針を示しました。自治体による改善命令を可能にし、事前の届け出を義務付けます。

しかし、無料・低額宿泊所の環境を整えることは大切ですが、今のように公的支援が不十分なままで、規制ばかり強化するのは、施設の運営がさらに厳しくなり、施設が減少することで受け入れられる入居者の数も減ってしまい、高齢の生活困窮者の居場所がなくなるという、不幸な結果を招くのではないかと心配です。

習志野俘虜收容所

から見えるわがまち

2018年2月3日（土）、東習志野コミュニティセンターで、「習志野のドイツ俘虜」についての講演がありました。

1914年（大正3年）、第一次世界大戦において日本はドイツと戦うことになりました。同年11月、日本軍の猛攻によって中国山東省の青島（チンタオ）（ドイツ租借地）は陥落し、約5千名のドイツ兵が捕虜となりました。彼らは日本に送られ、翌1915年に習志野に收容されました。

習志野收容所長であった、西郷寅太郎大佐はドイツの士官学校に留学していた経験を持ち、ドイツに深い理解を持っていましたし、また、戦争の悲惨さ・敗れた者のみじめさもよく知っていました。当時の習志野收容所は国際法を遵守して、俘虜を扱いました。

ドイツ人俘虜たちは、勤勉なドイツ人らしく、日本側が用意したバラックの他に、広大な構内にラウベ（あずまや）と呼ばれる小屋をつくり、演奏会や演劇を行う野外ステージを作り、「習志野捕虜オーケストラ」が演奏会をしました。菜園をつくり、ビールまで醸造して、また、印刷所では、日本情緒あふれる絵葉書まで作っていたそうです。

単調な捕虜生活を彩ったのは、音楽を初めとする文化活動と、スポーツでした。

1919年（大正8年）、ベルサイユ講和条約が発効し、收容者たちは帰国しました。

当時、周囲の日本人は大人も子どもも、收容所から流れてくるオーケストラの調べを聞いたり、交流をしたりしていました。

袖ヶ浦地区 節分豆まき大会

2月4日（日）、袖ヶ浦西近隣公園にて、節分豆まき大会が催されました。

豆まき大会に先立ち、袖っこ連による太鼓演奏がありました。地域の方の指導の下、地域の子どもたちが元気よく太鼓演奏を披露してくれました。

大会では福笑いならぬ、「鬼笑い」に子どもたちが挑戦し、愉快的な鬼の顔に大笑いしました。地域の方と、第三中学校の野球部の生徒たちが鬼にふんし、子どもたちから投げられる豆を受けて、逃げ回りました。本当に楽しく、盛大な大会となりました。

◎節分「鬼」豆知識

なぜ、鬼は「角」をはやして

「虎の皮のパンツ」をはいているの？

【答え】「風水」では北東の方角が「鬼門」になっています。鬼門の方向に「丑⇒うし」と「寅⇒とら」があります。そのため、「鬼」はウシの角をはやして、トラの皮のパンツをはいているのです。

